

チリ軍政弾圧 抗議の手芸

女性の力強さ感じて

松代でアルピジェラ展

チリの素朴な伝統工芸「アルピジェラ」。絵画的なキルトの一種だが、1973〜90年のチリの軍事政権時代には、政権の横暴を告発する「布と針による抵抗運動」として盛んに作られた。軍事政権発足から40年となる今年、悲しくも力強いチリの女性たちの思いを感じてもらおうと、長野市松代町の大島博光記念館は3日から、所蔵するアルピジェラのうち約80点を紹介する企画展を開く。

反対派を厳しく弾圧した一を強いられたり、夫が政治軍事政権下で、貧しい生活 犯として逮捕された女性た

チリの軍事政権 1973年9月、アウグスト・ピノチェト陸軍司令官(当時)が米国を後ろ盾にクーデターを決行。銅会社の国有化など社会主義的政策を進めていたサルバドル・アジェンデ大統領を自殺に追い込み、政権を奪取した。90年3月の民政移管まで、左翼勢力を徹底して弾圧。誘拐や拷問などによる死者・行方不明者は約3200人に上ったとされる。

ちは、教会などの援助で共同作業所を設立し、アルピジェラを作り始めた。自らの経験を表現するためだった。作品は海外に持ち出され、各国の人権団体などによって販売された。一連の

活動は、チリの状況を広く伝えるとともに、女性たちを経済的に支えた。

アルピジェラの材料は、すべて日常生活の余り物。小麦やジャガイモを入れた麻袋を下地とし、端布でカラフルなパッチワークをしたり、小指ほどの小さな人形を縫いつけたりした。

表現手法が素朴な分、深刻なテーマが胸を打つ。収蔵作品には、収容所の様子や拷問の場面といった政治弾圧を描いたものや、チリの伝統的な踊り「クエッカ」を行方不明になった夫や恋人の写真を胸に貼って踊る女性といった悲しみと抗議の意志を表したものもある。また、女性たちの共同作業の様子を描いた作品に

は、抑圧された状況下であっても、明るさを失わず力強く生きる女性の姿が表現されている。

アルピジェラは日本でも、74年創設の支援団体「チリ人民連帯日本委員会」が購入し、チリの女性たちを支えた。同会で活動した詩人、大島博光(1910〜2006年)を顕彰する大島博光記念館が保管する約90点は、90年前後の作品。短辺が40センチ、長辺が50センチ程度のものがほとんどだ。アルピジェラに詳しい東北学院大学の酒井朋子講師(34)によると、同館のアルピジェラは、作られた時代を反映し、軍事政権が終わり、未来に向けての希望や明るさを感じとれる作品が多いという。

企画展は10月31日まで。記念館の大島朋光館長(67)は「作品は一見、色とりどりでかわいらしい。一方で、作品に込められた女性の様々な思いを感じられる」と話している。

大島博光記念館が保管する多様なアルピジェラ

クーデター直前のピノチェト司令官(左)とアジェンデ大統領



大島博光記念館が保管する多様なアルピジェラ
クーデター直前のピノチェト司令官(左)とアジェンデ大統領
1973年8月、AP

